

『表現学』第六号 令和二〇二〇年三月四日 抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

「浄土法身讚」・「大乘浄土讚」の諸本について

大屋正順

「浄土法身讚」・「大乘浄土讚」の諸本について

大屋 正順

はじめに

「浄土法身讚」あるいは「大乘浄土讚」は、『浄土五会念仏誦経観行儀』（『五会法事讚』の広本、以下『広本』とする）巻下の第一八番目にある讚文で、この兩名で流布していたことがわかっている。これまで、上山大峻（『上山 一九七六』）・廣川壽敏（『廣川 一九八二』）・張先堂（『張 一九九八』）によって写本が整理され、その後、齊藤隆信の研究（『齊藤 二〇〇五』）²では韻律を重視した校訂テキストが作成された。本稿では、管見のかぎり諸写本を翻刻して対照し、文字の異同と伝写の様相を確認して考察を加える。

諸写本の原件参照に際し次のものを使用した。

・Website³

①The International Dunhuang Project (IDP) [<http://idp.bl.uk/>]
ペリオ本については次のサイトも使用した。

②Gallica

[<https://gallica.bnf.fr/accueil/fr/content/accueil-fr?mode=desktop>]

③ペリオオンラインの科学分析（龍谷大学）

[<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/pelio/index.jsp.html>]

・刊本

①ペリオ本……『法藏敦煌西域文獻』（上海古籍出版社・法国国家図書館編 上海古籍出版社 一九九二～二〇〇一）

②スタイン本……『英国国家図書館藏敦煌遺書』（方広錫・吳芳思主編 上海師範大學 英国国家図書館合編 広西師範大學出版社 二〇一〇）

二〇二〇年一月現在、第五〇冊まで刊行済み。S2770号まで集録。

③北京本……『国家図書館藏敦煌遺書』（中国国家図書館編 任繼愈主編 北京図書館出版社 二〇〇五～二〇一〇）

④ロシア本……『俄藏敦煌文獻』（孟列夫・錢伯城主編 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・俄羅斯科学出版社東方文学部 上海古籍出版社編 上海古籍出版社 一九九二～二〇〇一）

⑤杏雨書屋本……『敦煌秘笈』（公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋編 公益財団法人武田科学振興財団 二〇〇九～二〇一三）

⑥守屋本……『京都国立博物館蔵品出版目録 書跡編 中国 朝鮮』（京都国立博物館 一九九六）

・所蔵者による画像の貸出

①守屋本……京都国立博物館の画像貸出利用制度を利用

[<https://www.kyohaku.go.jp/jp/pv/index.html>]

・本文中での略号は次の通り。

Website……①：[IDP] ②：[Gallica] ③：[龍谷]

刊本……①：[法] ②：[英] ③：[北] ④：[俄] ⑤：[杏] ⑥：[守]

所蔵者による画像の貸出……①：[京博]

・文献番号に付す略号は次の通り。

ペリオ本：P／スタイン本：S／北京本：BD／ロシア本：Dx／杏雨書屋本：羽／守屋本：京博

一 対照本の選定と対照表の作成

〔廣川 一九八二〕附表一で示されている写本は次の一四本である。

P2963・宇屋本・P2483・P3645・P3839・S370・S382・S447・S3096・S3685・
S5569・S6734・O1361・O1376

この中のS370は「同会往極楽讚」「五台山讚」を含む七字句と五字句の讚文、S3685は「救諸衆生苦難經」であり、共に浄土法身讚（大乘浄土讚）と一致する讚文は確認できなかった。また、O1361とO1376について、略号「O」は「オルデンブルク本の略称」としているが、実際には孟列夫主編『俄藏敦煌漢文写卷叙録』で付された番号で、「張一九九八」一覧表では、孟1361 (Dx-883 (1))・孟1376 (Dx-1047) となっている。この前者O1361は目録情報に少々混乱が生じていることがわかった。

まず、「張一九九八」一覧表の孟1361 (Dx-883 (1)) の項を確認すると

- (一) 西方極樂贊 (前殘) / (二) 浄土修行贊 / (三) 法船一去贊 /
- (四) 往生極樂贊 / (五) 宝鳥贊 / (六) 蘭若空贊 (尾殘)

とある。「張一九九八」が扱っているのは、孟列夫編『蘇聯科学院亞細亞民族研究所藏敦煌漢文写本註記目録』(第一冊：一九六三年、第二冊：一九六七) である。

次に、孟列夫主編『俄藏敦煌漢文写卷叙録』上冊 (上海古籍出版社、一九九九年、五二五〜五三六頁) を確認する。

1361

Dx-883a

殘卷、一一三・五×二七。部分手卷、首尾欠。四紙、第一紙及最後一紙不全。最後一紙僅存中間部分。上下辺沿破殘。六二行、毎行二〇―二二字。紙色微褐。楷書、字体稍潦草、濃筆画蒼勁有力。……

(一) 浄土法身讚(?)。翟理斯、六一〇三、中有類似標題。手卷首、六五×二七。

写卷首欠。一紙、第一紙不全。三三行、(第一行至第三三行) 毎行二〇―二二字。無題字。從『六時雲集上金橋』、到『莫妄今主說法 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏』。

(二) 往生極樂讚……手卷続卷、一一×二七。……

(三) 宝鳥讚……手卷続卷、九・五×二七。……

(四) 蘭若空讚……手卷続卷、一九×二七。……

とあり、四種の讚文と詳細な情報が掲載されている。浄土法身讚には「?」が付されており、釈文の冒頭と末尾の語句情報から判断しても浄土法身讚ではない可能性が高い。孟の目録情報は一九九九年の上海古籍出版社版で更新されたと判断する。

次頁「俄羅斯」⑦にDx-883を冠する文献を確認する。

Dx00883A 発願文 / Dx00883AV 雜写 / Dx00883B 施物疏 / Dx00883C 付披
子疏 / Dx00883CV 藏文殘字

とあり、浄土法身讚はなく別な文献が掲載されていた。

また「DDP」にDx-883を冠する文献を検索すると次の七本のサイズ情報が出る。

Dx-883a(1) 二七×六五 \mathbb{E} / Dx-883b(1) 二二×二七 \mathbb{E} /
Dx-883c(1) 九・五×二七 \mathbb{E} / Dx-883d(1) 一九×二七 \mathbb{E} /
Dx-883(2) 八×二二・五 \mathbb{E} / Dx-883(3) 四×二五 \mathbb{E} /
Dx-883(4) 一四×二七 \mathbb{E}

このDx-883のardが、孟の上海古籍出版社版目録のサイズ情報と一致していることがわかる。

以上のことから、Dx-883についてはそれが指し示す文献の実体が確定できない状況にあるが、孟の上海古籍出版社版目録と「DDP」の情報とを合わせると、Dx-883には讚文が書かれている文献が四本存在するものの、浄土法身讚（大乘浄土讚）は含まれない可能性が高いといえる。

よって、本稿での対照本は「廣川一九八二」附表一の一四本からS370・S3685・O1361を抜いた一一本に「張一九九八」一覧表で追加されたP2690背・P3697・S6109・北8347 (生25) の四本を加え、さらに「齋藤二〇一五」で対校本の二つとして使われた羽634と羽711の二本と、国際仏教学大学院大学附属図書館刊『大藏経対照目録II 大藏経・敦煌出土仏典対照目録』(第二版、二〇〇六) のNo.2828大乘浄土讚の項にあるDx02890・Dx00508Vの二本を加えた合計十九本とする。

なお、対照表の最初には「齋藤二〇一五」の韻律に基づいて校訂されたテキストを掲げた。このテキストは「P2963を基に、P3645・P3839・羽634・羽711と対校し、韻律に基づいた判断で文字を確定しており、それ以外の対校作業については「上山一九七六」の参照を促している。その「上山一九七六」では、P2963の翻刻を行っている。P382・S3096・P2483・P2690・P3839と対校し、P2963になく「碎末為金礦」以降の文は対校本で補って、「諸写本校合『浄土法身讚』」を作成している。「齋藤二〇一五」では、諸写本を材料としながら韻律という基準でいわば理想のテキストを作成している点で画期的であり、諸写本の識語等の周辺情報による価値付けがなされていない中立的テキストと位置づけ、対照表の冒頭に掲げて諸写本との対照を簡便にし

た。なお、本文中で句数を示す際は、この齊藤本の句数を使用する。

対照表の作成にあたりなるべく忠実に見えるままの文字での翻刻を心がけた。表中の記号については次のとおり。

- ・不明瞭な文字は□で表記した。
 - ・欠けている部分はあるが、おおかた判読が可能な文字はその文字を□で囲んだ。
 - ・塗りつぶして訂正してある文字などは、脇に書かれている訂正後の文字で表記し、その文字の右側に傍線を付した。
 - ・塗りつぶしている文字は●で表記した。
- 対照表は、「浄土法身讚・大乘浄土讚 諸本対照表」として巻末に掲載する。

二 諸本の情報

(1) P2483

[DDP] あり

[Gallica] あり

[龍谷] あり。Microscopic Analysis あり。年代：北宋・太平興國四年（九七九）

[法国] ⑭二六〇頁

裏面に「維大宗開宝四年己卯歲」とあるが、「開宝四年」と「己卯歲」は一致しない。

開宝四年は九七一年で辛未歲。「龍谷」では「己卯歲」を書写年としている。

首題は「大乘浄土讚寫本」。一句目から三四句目までは五字一句で字句との間に一字分空白を入れているが、二五句目からは区切れを意識した書き方ではなくなる。右上がりの強い楷書体。

(2) P2690V

[DDP] あり

[Gallica] あり

[龍谷] なし

[法国] ⑰二六二～二六三頁

表面は冒頭の野線外に「廿二問」と標題があり、曇曠の『大乘二十問本』が第九問の途中まで書かれている。

裏面に複数の讀文の一つとして書かれているが、この讀文だけ行が左から右へ進む右行形式で書かれている。首題が「大乘浄土讚」で尾題が「大乘讀一本」。

また、裏面冒頭紙には「甲戌年九月廿七日」「敦煌貳拾詠」等の記述があり、最終紙には「甲戌年二月十六日」「浄土□僧保福□……」という署名がかすかに残っている。なお、「こちらも辛うじて確認できる程度だが、「大乘浄土讚」という首題と冒頭の數句を書いた痕跡が二ヶ所ある。甲戌年は九七四年を想定しよう。

(3) P2963

[DDP] あり

[Gallica] あり

[龍谷] あり。Microscopic Analysis あり。年代：後漢（五代）・乾祐四年（九五二）

[法国] ⑳二六五頁

『広本』巻下の一本。大正蔵 No.2827 の底本となっている。No.2827 は『広本』の巻中と巻下で、巻中は P2066 が原本、巻下は P2250 が原本で P2963 が甲本である。P2963 は『広本』巻下の第二十番目の讀文「四十八願讚」の途中から始まっており、P2250 は『広本』巻下の第二十一番目の讀文「西方雜讚」の途中までしか存在しないため、それ以降は P2963 が底本となっている。ここでは、首題が「浄土法身讚 此讚通一切処誦（割書）」で「釈法照」と明確に作者名を書いている。この文献には跋文と識語があり、その識語は大正蔵では、

時乾祐四年歲次辛亥蕤賓之月莫願十二葉於宮泉大聖先嚴寺講堂後彌勒院寫故記となつてゐるが、この「日」は「月」、「莫」は「莫」、「願」は「彫」、「宮」は「石」に訂正してよいだろう。「日」にも「月」にも見えるが、「蕤賓（スイヒン・陰曆五月の異称）月」とするのが適当であるし、「莫」の草冠の下にはウ冠が確認できる。「願」の「原」は「岡」であり、「頁」ではなく「形」にとつて問題ない。「宮」字は修正しており、二点打つてから改めて大めの線で「石」にしている。よつて、

時乾祐四年歲次辛亥蕤賓之月莫願十二葉於宮泉大聖先嚴寺講堂後彌勒院寫故記となる。乾祐四年は九五二年で、「龍谷」はこれに拠つて書写年代を特定している。「廣川 一九八二」は「乱雑な楷書」とするが、野線に沿つて句間の空白を保ちながら書き連ねており、決して謹嚴とは言えないものの字配りに配慮を伺わせる書きぶりである。第八紙途中までは七字句で一行に二句書き、句間を広めにとつており、そこからは五字句で一行に四句ずつおさめている。裏面には、勸善文・南宗贊が書かれている。

(4) P3645V

[DDP] あり

〔Gallica〕あり

〔龍谷〕なし

〔法国〕②①〇七頁

表面には、前漢劉家太子伝・季布詩詠・仏母誦文・金剛經讀文、裏面には、薩埵太子讚・大乘浄土讚・金剛五礼文・仏母讚・涅槃讚・無相礼一本・法身礼一本といった題がみられ、両面に関して〔DDP〕で詳しいコメントが付されている。

⑨P3697

〔DDP〕あり

〔Gallica〕あり

〔龍谷〕なし

〔法国〕②③三四五頁

表面が「大乘浄土讚」と「捉季布伝文」、裏面が「受人関斎戒」。両面に関して〔DDP〕で詳しいコメントが付されている。

大乘浄土讚の末尾に続いて「顯徳二年乙卯歳九月廿六日晝〇記」と大ぶりの文字で書かれ、それに続いて「捉季布伝文」が書かれている。「捉季布伝文一卷」という首題の二行前に文字が確認できるが、その上から紙が接がれているため行の半分しか見られず文字を判読することはできない。「捉季布伝文」は野線がひかれた紙に書かれているが、大乘浄土讚の末尾が書かれた紙には野線がなく、不自然な紙接ぎとなっている。おそらく「捉季布伝文」が書かれた紙に「受人関斎戒」を書いていき、不足した部分を補う目的で使用した紙が「大乘浄土讚」の末尾が書かれた紙であった、ということであろう。顯徳二年は九五五年で、干支も乙卯で一致する。

⑨P3839

〔DDP〕あり

〔Gallica〕あり

〔龍谷〕なし

〔法国〕②③三〇頁

〔DDP〕のサイズ情報によれば、十五・七×十六・五×七十一・七cmで、掌中版であることがわかる。

〔法国〕では題名が「西方浄土讚」となっているが、内容は大乘浄土讚である。首題は冒頭の文字が欠けており判読できず、尾題は「浄土讚一本」で、そのあとに一文

字文の空白があつて「十二時」とある。

⑦S382

〔DDP〕あり

〔英国〕第六冊 図版：九七〇九八頁 書誌：一二頁

〔英国〕では、書写年代を九〇十世紀・帰義軍時期としている。首題は「大乘浄土讚」一本。大正蔵 No.2828 の底本。

⑧S447

〔DDP〕あり

〔英国〕第七冊 図版：九三頁 書誌：四頁

〔英国〕では、書写年代を九〇十世紀・帰義軍時期としている。裏面に書かれているものは「太子大師告紫亭副使等帖」で、表裏両者は無関係としている。首題は「浄土讚」。第一八句目の「無若徳心安」、第四七句目の「懃々辺自照」の脇には、それぞれ他本と近い句が加筆されている。対照表ではその句をへで示した。

⑨S3096

〔DDP〕あり

〔英国〕未刊

首題なし。讚文のあとに別筆で五行の文章があり、裏面に続いている。『敦煌玉蔵』第二六冊二頁では、裏面の文章を「仏本行集経演繹文」としている。表面の最終五行はその前段の文章と考えられる。「父王」「太子」「四門」「東門」「南門」「西門」「北門」といった単語が見られるが、出典は不明。

⑩S5569

〔DDP〕あり

〔英国〕未刊

首題なし。〔DDP〕のサイズ情報では、十五・一×八五cmで、掌中版であることがわかる。首題と尾題はなく、大乘浄土讚の最終句「子父不交伝」に続ける形で「安土地真言……」と真言が書かれ、それに続けて「十空讚一本」と首題を付した十空讚が書かれている。裏面は白紙。

⑩S6109

〔DDP〕あり

〔英国〕未刊

首題は「大乘浄土讚」、尾題は「大乘浄土讚一本」。尾題のあと改行して次の文が書かれている。

南无西方極樂世界大慈大悲阿彌陀佛^三説

南无西方極樂世界大慈大悲觀世音菩薩^三説

南无西方極樂世界大慈大悲大勢至菩薩^三説

地藏菩薩

上來稱揚 十念功德 資益亡靈 惟願花臺 花蓋空裏 來迎寶座 金床摩尼

殿上乘空 接引聽説 苦空八解 池中蕩除 无明諸垢 龍花三會 速證无生

彌勒尊前 分明授記 現存眷属 富樂百年 過往亡靈 神生浄土 和南一切賢聖

弥陀・觀音・勢至・への帰依文が冒頭にあり、割書きで「三説」「三説」「三念」とある。儀礼を行う際に読むためのテキストづくりとしての書字行為が前提にありながら、讚文を書き、帰依文を書き、願文を書くという書字行為そのものが儀礼としての意味を持つことをうかがわせる文献である。

〔S〕S6734V

〔DDP〕画像なし

〔英国〕未刊

〔DDP〕は画像がなくサイズ情報のみで、二五・六×九一・四cm。『敦煌写蔵』第五一冊、一四五〜一四六頁によると、表面は『思益經』の巻第三で、裏面が「大乘浄土讚」となっている。首題は「大乘浄土讚」であるが、少し離れたところに

思益經卷第三

雍熙三年丙戌十一月廿三日施主弟子尹松志因爲

結壇□函經妙法蓮華經破砕各記頭者

とある。『思益經』の方は謹厳さを保ちながら整然と書かれているが、大乘浄土讚は字粒がまちまちで字形の安定感に欠ける。大乘浄土讚が書かれた紙を使用し、あとから『思益經』を書いたと思われる。雍熙三年は九八六年で、年号と干支も合致する。

〔E〕BD03925V05

〔DDP〕あり

〔北京〕第五四冊 九六〜九七頁

〔北京〕では、十世紀・帰義軍時期写本としている。表面は「降生礼文」から始まり、裏面は「金光明最勝王經卷第一序品第二」から始まっている。裏面には十五の文献が

あり、大乘浄土讚はその五番目に出る。四番目の文献は「甲戌年正月一日」で始まっており、「北京」ではこの干支を九七四年としている。首題は「大乘浄土讚一本」で讚文のあとに、「知進索殘子自手題記之耳交流辰□」とある。

また同紙には、「己亥年二月三日立契慈惠……」「龍興寺己亥年二月五日立契敦煌鄉爺訥見鉢……」といった文もある。龍興寺は、法照によって『広本』が書かれたとされる大原の龍興寺と一致するのは不明である。「己亥年」は九七五年が想定される。

〔D〕DX00508V

〔DDP〕なし

〔俄羅斯〕⑥三二八頁

五行の断片で文字の判読が困難。『俄羅斯』では「蓮生法性流偈」としている。表面は「地藏菩薩本願經」で六行の断片。こちらの文字は明瞭で、一行十七文字の形式を保ち文字も謹厳。第三八〜四一句の四句が存在しないのはこの文献のみ。

〔D〕DX01047

〔DDP〕画像なし

〔俄羅斯〕⑦二八二頁

首題は「浄土法身讚」。〔DDP〕のサイズ情報では二一・五×三〇cm (h×w) だが、『俄羅斯』の写真では縦の方が長い。縦置きにして書いたのかもしれない。一枚の紙に書かれており、紙継ぎはない。用紙と最終行の書かれ方から、四八句目以降は念頭にないと思われる。四四句目の二文字目で終わっており、用紙の破損状況から考えても、四七句目まで書いたものが破れたとは考えにくい。もともと左下が少し欠けていた紙に首題から書いていき、四七句目まで書く予定だったが、徐々に字粒が大きくなり最終的に収まらなくなってしまうということかもしれない。

〔D〕DX02890

〔DDP〕なし

〔俄羅斯〕⑩一一四頁

首題は「大乘浄土讚一本」。讚文のあとに「此讚只用●●阿□●●一心除ノ誦者不得乱人傳讀者」とある。●は塗りつぶして修正した痕跡。

〔D〕羽 634

〔杏雨〕影印冊八、三四七〜三五〇頁

これは、『広本』巻下の一部で、浄土法身讃・浄土五字讃・厭苦帰浄土讃が書かれている。書体は楷書で、謹厳さや字形の整齊感に欠けるが、点画は明瞭で一字一句時間をかけて書かれており、句間の余白に統一感をもたせる配慮もある。これには後跋があり、『齊藤二〇一五』三六〇頁で翻刻されている。

〔8〕羽 711

〔杏雨〕影印冊九、一二九〜一三〇頁

首題は「大乘浄土讃」で尾題は「大乘浄土讃一本」。首題の前に、紀年識語があり、『杏雨』で翻刻されている。「癸未年三月五日」に「連台寺」で「釈門法律員会」が、自身の患疾を契機に各種讃文を書写した旨が記され、諸願の成就を祈っている。癸未年は九八三年を想定できる。書写したとされる讃文は、大乘五戒讃・一更長讃・太子五戒讃・大乘無想礼讃・大乘智公和尚十二時聖教十二時讃・浄土法身讃・般若讃・金剛五礼讃・十空讃・六根讃・維摩讃・觀經十六觀讃・出家讃・歎西方厭娑婆讃・仏聖果讃・五戒讃で、それを「員会兼念得此讃」とあることから、僧「員会」が書写に併せてこれらの讃を念じたことになる。最後の願文では、「願に続けて」「皇王万歳、郡主千秋、国泰人安、時豊歳稔、然願、夫人貴寿、福樂百年、管内僧俗、普皆樂業、法界有情、同登彼岸」とある。

列挙された讃文に浄土法身讃はあるが大乘浄土讃はなく、識語と大乘浄土讃の書きぶりが全く異なることから両者に直接的な関係はないと思われる。また、大乘浄土讃の末尾六行分は接がれた別紙に書かれている。よって、本文献は、A氏が「員会」の諸讃文書写に関する「識語」を書き、B氏がその紙の余った部分に大乘浄土讃を書き始めたものの、紙が足りなくなったため継ぎ足して最後まで書いた、と考えられる。

〔9〕守屋本

〔守屋〕一二頁

〔京博〕B甲 274

『浄土五念念仏誦經觀行儀』巻下的一本。『西方浄土讃』の後、「浄土五字讃」の前にあり、首題は「浄土法身讃」、続けて割書で「此通一切処誦」、さらに「釈法照」とある。また後跋も存在する。『齊藤二〇一五』四三八頁で、守屋本の真偽問題に言及しており、「韻律上から守屋本によってのみ校訂しうる傷も存在する。」「韻律からすると偽写本とは思えないのである。」としている。

三 考察

対照表を見ても明らかのように、文字の異同が多く、同じ文字の同じ句を採る方が困難ほどである。齊藤本に合致するようなテキストも見つけられなかった。まず、次の三つの観点で一九本を分類する。

【題号】

- ・大乘浄土讃……………(1)・(2)・(4)・(7)・(11)・(12)・(13)・(16)・(18)
- ・浄土法身讃……………(3)・(15)・(17)・(19)
- ・浄土讃……………(8)
- ・不明……………(5)・(6)・(9)・(10)・(14)

(5)は題号なし、(6)は二文字欠けて「□□浄土讃」、(9)は題号なし、(10)は題号なし、(14)は題号なし。

【第二四句目と二五句目の間の「池裏金沙水 蓮中法性流 花開花子説 我本根油處 (P2483ではこの字句・異同多し)」という四句の有無】

- ・有……………(1)・(2)・(4)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・(12)・(13)・(14)・(15)・(16)・(18)
- ・無……………(3)・(17)・(19)
- ・不明……………(5)

(5)は前半部分欠のため不明。「無」の題号は「浄土法身讃」であるが、(15)は「浄土法身讃」でありながらこの四句を有しているため、四句の有無と題号の違いは完全には重ならない。

【第五七句目と七六句目「碎末為金礦く子父不相伝 (齊藤本ではこの字句・異同多し)」という二〇句の有無】

- ・有……………(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)・(10)・(11)・(13)・(16)・(18)
- ・無……………(12)・(15)・(17)・(19)
- ・不明……………(14)

(1)は最初の二句のみ存で以下欠。(14)は断片のため不明。(15)は、用紙破損のため不明だが、後に文字が続く様子がなかったため、おそらく「無」。

【齊藤二〇一五】では、この後半部分について、

はたして浄土法身讃の原初形態は後半部分を有していたのであろうか。その前半部分は韻律上の問題はないが、後半の「碎末為金礦」以下は上述のごとく欠落しているテキストがあることや、他の法照自作の讃偈と比較すると韻律の乱れが顕

著である(特に⑤と⑦)ので、現在のところこれを法照自作とするか否かは保留としておきたい。韻律からすると、どうしてもその部分は法照の時代よりも一〇〇年から二〇〇年後を想定せざるをえないからである。(四二一〜四二二頁)としている。ここでいう⑤は「碎末為金礦 礦中不見金 智者用消鍊 真金腹内現」を、⑦は「三乘元不識 外道未曾聞 小根多毀謗 誓願不流伝」を指している。

仮に、原初形態は後半部分を有していなかったとすると、(12)SS6734V「大乘浄土讚」、(15)DX1047「浄土法身讚」、(17)羽634「浄土法身讚」、(19)守屋本「浄土法身讚」の四本が原初形態を探る手がかりとなるが、(12)は題号が「大乘浄土讚」であり、(15)と(17)と(19)は「浄土法身讚」であるため、後半二〇句の有無と題号の違いとは完全には重ならない。「浄土法身讚」という題号が使用されている四本のうち、(3)・(17)・(19)は『広本』の一部であり、途中の四句と後半部分がなく、これが『広本』で用いられる際に「浄土法身讚」と題された可能性はあるが、(3)には後半部分が存在するためそれとすんなりと断定はできない。また(15)は、単独で用いる場合でも「浄土法身讚」という題号を使用していた一例といえる。

【浄土法身讚】

- ・この讚文を『広本』の一部として用いる際の呼称
- ・第二四・二五句間の四句がない
- ・第五七〜七六句目がない

〈例外〉

- ・(3)PS963は、題号は「浄土法身讚」だが、第五七〜七六句目がある
 - ・(15)DX1047は、題号は「浄土法身讚」だが、第二四・二五句間の四句がある
 - ・(17)DX1047は、題号は「浄土法身讚」だが、単独で書写
- ・この讚文を単独で用いる際の呼称

【注】

1 上山大峻「敦煌出土『浄土法身讚』について」、『泉宗研究』第二輯、一九七〇、廣川肇敏「敦煌出土法蘭關係資料について」、『石田充之博士追記論文集 浄土教の研究』永田文直編、一九八二、張其華「晚唐至宋初浄土五会念佛集团在敦煌的流傳」、『敦煌研究』一九九八、第一期。

2 齊藤隆信「中国浄土教儀礼の研究―善導と法照の輪郭の律動を中心として」、『法蔵館』二〇一五

3 Website: <http://www.dharmadownload.com/> (2010年1月最終閲覧)

- ・第二四・二五句間の四句がある
- ・第五七〜七六句目がある

〈例外〉

・(12)SS6734Vは、題号は「大乘浄土讚」だが、第五七〜七六句目がない
次に、識語や同一紙に書かれた他文献の情報から書写年に関するものを抜粋する。

【書写年情報】

- (1)九七九年(九七一年) (2)九七四年 (3)九五一年 (5)九五五年 (12)九八六年
 - (13)九七四年・九七五年 (18)九八二年
- 書写年を特定する決定的な材料にはなりえないものの、大きくかけはなれた時代に同一用紙を使用することは考えにくいいため、時期的な目安にはなる。

小結

「浄土法身讚」あるいは「大乘浄土讚」のテキストは管見の限り一九本確認できる状況にあり、文献全体の情報から、このうちの七本は九〇〇年代後半(九五一年前後)〜九八六年前後に書かれた可能性が高いことがわかった。テキスト間の文字の異同が多く、原形を特定することは困難な状況にある。

題号の違い、第二四・二五句間の「池裏金沙水 蓮中法性流 花開花子説 我本根油處」の有無、第五七〜七六句目「碎末為金礦 子父不相伝」の有無、これらの情報が完全に重なることはなく、原初形態の輪郭が浮かび上がることはなかったが、題号ごとの基本的な特徴は明らかになった。

「浄土法身讚」は、この讚文を『広本』の一部として使用する際の呼称で、第二四・二五句間の四句がなく、第五七〜七六句目がない。「大乘浄土讚」は、この讚文を単独で使用する際の呼称で、第二四・二五句間の四句があり、第五七〜七六句目がある。例外はあるものの、両者はこのような傾向にあるといえる。

4 阪一九九八の表では「DX1047」とあるが誤植で、実際には「DX1047I」とある。

5 http://dpl.bl.ucl.ac.uk/database/search_results.asp?result=925135709&random=16374

6 齊藤 二〇一五「五五〇〜五五三頁」

7 塚本善隆「唐中期の浄土教―特に法照禪師の研究」、『法蔵館』一九七五、一七四頁。『塚本善隆著作集 第四巻・中国浄土教研究』(大蔵出版社、一九七〇)三八六頁でも同様に読んでいる。なお、前者では「彫」が「明」となっているが、後者では「彫」に訂正されている。

文 本		者作/明題	No.																											
28 弘却意中塵	27 洞閑三藏教	26 三昧寶王珍	25 注想常觀察	24 寶坐自然迎	23 塵勞須斷却	22 智珠常用明	21 惠鏡無令闇	20 願如証菩提	19 清淨無塵垢	18 洗却意中泥	17 暫引池邊立	16 超出離人天	15 坐臥空霄裏	14 恬然無所緣	13 寂寂幽靈靜	12 惠鏡朗然明	11 了知無所有	10 高聲不染聲	9 觀像而無像	8 解脫得清涼	7 知心無處所	6 神光遍十方	5 意殊恒自淨	4 法界總同然	3 神通妙刹土	2 心通悟色堅	1 法鏡臨空照			
佛却意中泥	迎還三藏教	三昧寶王真	相觀常察	池裏金沙水	塵勞須斷却	知者常用明	惠鏡無令闇	願汝證菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	暫到池邊立	超出離人天	座臥空消理	悟李無所元	口油空淨	惠鏡浪然明	了知無所有	高聲不染聲	觀相而無相	解脫得清涼	至心無處住	身光照十方	意殊恒自淨	法界惣通然	見心淨妙察	心通五色現	法鏡林空照	P2483	(1)	大乘淨土讚 壹本
佛却意中泥	同閑三藏教	三昧寶王真	注想常觀察	池令金沙數	塵勞須斷却	知中常用明	惠境勿令闇	願以證菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	暫到池邊立	超出離人天	座臥空霄裏	悟則無所緣	策子遊空正	惠鏡浪然明	了知無所有	高聲不染聲	觀想如無想	解脫得清涼	至心無住處	身光照十方	意殊恒自淨	法界亦通然	見心淨妙察	身通五色現	法鏡臨空照	P2690V	(2)	大乘淨土讚
佛却意中泥	洞閑三藏教	三昧寶王珍	口想常觀察	池裏金沙水	塵勞須斷却	智珠常用明	惠鏡無令闇	願汝證菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	暫引池邊立	超出離人天	坐臥空霄裏	恬然無所緣	寂寂幽靈靜	惠鏡朗然明	了知無所有	高聲不染聲	觀像而無像	解脫得清涼	知心無處所	神光遍十方	意殊恒自淨	法界惣同然	神通妙刹立	心通悟色堅	法鏡臨空照	P2963	(3)	淨土法身讚 此讚通 一切處釋照
弗却意中泥	追尋三藏教	三昧寶王真	初相常觀察	池裏金沙水	塵勞須斷却	智者常用明	惠鏡無令闇	願如証菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	暫到池邊立	超出離人天	坐臥空消理	互李無所无	策子由空淨	惠鏡浪然明	了諸無所有	高聲不染聲	觀相而無相	解脫得清涼	至心無處々	身光照十方	意殊恒自淨	法界亦通然	見心淨妙察	心通五色現	法鏡林空照	P3645V	(4)	大乘淨土讚
																												P3697	(5)	
佛却意中泥	巡還三藏教	三昧寶王真	虛想常觀察	池裏金沙水	塵勞須斷却	智者常用明	惠鏡無令闇	願如証菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	暫到池邊立	超出離人天	坐臥空消理	五句無所有	策子由空淨	惠鏡浪然明	了諸無所有	高心不染聲	觀想如無想	解脫得清涼	至心無處々	身光照十方	意殊恒自淨	法界惣通然	見心淨妙察	心同五色現	法鏡林空照	P3839	(6)	□□淨土讚
佛却意中泥	巡還三藏教	三昧寶王真	住想常觀察	池練金沙水	塵勞雖斷却	智者常用明	惠鏡無靈闇	願以證菩提	淨清無塵垢	洗却意中泥	暫到池邊立	超出裏人天	坐臥空消裏	悟則無所緣	側子由空淨	惠鏡浪然明	了諸無所有	高聲不口聲	觀想如無想	解脫得清涼	至心無處住	身光照十方	意殊恒自淨	法界亦通	見心淨妙察	心通五色現	法鏡臨空照	S382	(7)	大乘淨土讚一本
無有德心安	巡還三藏教	三昧寶王真	住想常觀察	池練金沙數	塵勞須斷却	智者常用明	惠鏡無令闇	願如証菩提	清淨無塵垢	洗却意中泥	漸到池邊立	超出裏人天	坐臥空消裏	吾則無所負	策子油空淨	惠鏡須然明	了智无所有	高聲不染聲	觀相如無相	解脫得清涼	至心無處住	身光照十方	意殊恒自淨	法界亦通然	見深淨妙察	心通五色現	法鏡林空照	S447	(8)	淨土讚
佛却意中泥	巡還三藏教	三昧寶王真	住想常觀察	池練金沙數	塵勞雖斷却	知者常用明	惠鏡無靈闇	願如証菩提	清淨無塵	洗却意中泥	暫到池邊立	照出裏人天	坐臥空消裏	悟里無所所	策子油空淨	惠鏡浪朱相	了知無所有	高聲不染聲	觀相如無相	解脫得清涼	至心無處住	身光照十方	意殊恒自淨	法界亦通然	見心淨妙察	心通五色現	法鏡臨空照	S3096	(9)	

66 秘密不教傳	65 涅槃末法	64 此界妄相禪	63 口談文字教	62 真如寂不言	61 仏相空無相	60 真金腹內現	59 智者用消鍊	58 礦中不見金	57 碎末為金礦	56 念仏即無生	55 悟理知真趣	54 自性本圓明	53 意珠恒瑩徹	52 塵垢不來過	51 勤勤返自照	50 智人即解磨	49 寶鏡人家有	48 塵垢更增多	47 不曾反自照	46 愚人解磨	45 寶鏡人家有	44 急手早勤求	43 慎勿令虛過	42 汝自不能求	41 諸佛在心頭	40 不識一生休	39 心中有寶鏡	38 愚人向外求	37 淨土在心頭	36 名為法性珠	35 若了此中意	34 無念是真如	33 念即知無念	32 西方在目前	31 初夜端心坐	30 念者入深禪	29 人今專念仏
秘密不交傳	涅槃末法	四界妄想禪	口談文字教	真如寂不言	仏相空無相	真金腹內現	智者用消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念仏即無生	悟理知中趣	自性本圓明	意珠恒瑩徹	塵垢不來過	勤々返自照	知人則解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	愚人解磨	寶鏡人家有	急手早勤修	甚物令虛過	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性除	若了次中意	無念是真如	念則知無念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	有人轉念佛	
秘密不交傳	涅槃末法	此界忘相禪	口談文字教	真如寂不言	佛相空無相	真金腹內現	智者用消鍊	礦中不見金	碎末為金礦	念仏即無生	悟理知真趣	自性本圓明	意珠恒瑩徹	塵垢不來過	勤勤返自照	智人即解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	愚人解磨	寶鏡人家有	急手早勤求	慎勿令虛過	汝自不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	名為法性珠	若了此中意	無念是真如	念即知無念	西方在目前	初夜端心坐	念者入深禪	人今專念佛	
秘密不教傳	涅槃末法	此界妄相禪	口談文字教	真如寂不言	佛相空無相	真金腹內現	智者用消鍊	礦中不現金	碎末有金礦	念仏即無生	悟里之真趣	自性本無明	意知恒明徹	塵勞莫來過	勤々返自照	智人則解磨	寶鏡人家在	塵勞更增多	遇人不解磨	寶鏡人家有	急專遺懃	甚物令通過	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	遇人向外求	淨土在心頭	是名法性除	若了次中意	无念是真如	念則智无念	西方在目前	初夜知心坐	念仏入深禪	有人專念佛	
秘密不教傳	涅槃槃求鉄法	此界妄相禪	口談文字教	真如寂不語言	佛相空無想	真金腹內現	至者用消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛即無生	悟里知真趣	自性本無名	意諸恒名徹	塵垢亦來過	勤々返自照	智人則解磨	寶鏡人家有	塵垢亦來過	遇人不解磨	寶鏡家々有	急守澳勤修	甚初令希有	汝此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	諸佛不能末	淨土在心頭	是名法性除	若了此中意	无念是真如	念則知無念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	有人專念佛	
秘密不交傳	涅槃槃末法	此界妄相禪	口談文字教	真如寂不言	仏相空無想	真金腹內現	智者容消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念仏即無生	悟理之終趣	自性本圓明	意殊恒名徹	塵垢不來過	勤々返自照	智人則解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	愚人解磨	寶鏡人家有	急手早勤修	甚物盡希有	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	深中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性珠	若料此中意	无念是珠如	念則知無念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	有人專念佛	
彼蜜不教傳	涅槃槃末法	四界望相禪	口談文字教	真如直不言	佛相空無相	真金腹內現	智者用消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛即無生	吾里之中趣	自性本負明	意趣恒名徹	塵垢不來過	勤々返自照	智人則解磨	寶鏡人家有	塵垢亦來過	遇人不解磨	寶鏡人家有	急手早勤修	甚物令虛過	如此不能求	諸佛在心頭	不息一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性珠	若了此中意	無念是真如	念則智無念	西方在目前	初也端心坐	念佛入深禪	有人傳念佛	
秘密不交傳	涅槃槃末法	此界妄相禪	口談文字教	真如寂不言	仏相空無相	真金腹內現	知者容消鍊	礦衆不現金	碎末為金礦	念佛即無生	悟理之真趣	自性本無名	意取恒名徹	自性本無名	勤々返自照	知人則解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	遇人不解磨	寶鏡人家有	急手早勤修	甚物盡希有	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	遇人向外求	淨土在心頭	是名法性珠	若料此中意	無念是珠如	念則知無念	西方在目前	初〇〇〇	念佛入深禪	有人專念佛		

他のそ・等文跋	題尾	
		67 心通常自用 68 威当度有縁 69 三乘元不識 70 外道未曾聞 71 小根多毀謗 72 誓願不流傳 73 道逢良賢 74 把手相傳 75 道逢不良賢 76 子父不相傳
		(1)
	大乘讚一本	(2) 心中常不用 威度々有縁 三乘元不識 外道未曾聞 少恨多毀謗 誓願莫流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫流傳
〔全体の後跋〕 上來依諸聖教略述 讚揚五會法事軌儀 以為三卷前之兩卷 其有明文意道群疑 歸心淨國衆等若念 誦讚行即依前卷遍 向發願文即便應知 時大歷九年冬初十 月於北京龍興寺再 述淨土念齋觀門禪 勝淨方辯妙覺之 圓明共處蓮花之會 願智・願善・深信・修行 狀離輪迴生死世界 專稱彼佛同往淨方 疾證菩提豈非善哉 樂哉矣有縁之者願 共歸西根性有差各 隨業云尔 / 淨土念 佛誦經觀行儀卷下 / 時乾祐四年歲次 辛亥癸亥之日某院 十二葉於石泉大聖 先嚴寺講堂後祇勒 院寫記		(3) 心通常自用 威當度有縁 三乘无不識 外道未曾聞 小相未曾聞 誓願不流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父不相傳
	大乘浄土讚文二本	(4) 心通常自用 威當度有縁 三乘无不識 外道未曾聞 少恨多毀謗 誓願不流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 誓願莫流傳
「讚文に続けて・改行して」 顯徳貳年乙卯 歳九月廿六日 畠□記		(5) 心通常目用 威當度在縁 三乘无不識 外道未曾聞 少恨多毀謗 誓願不流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父不傳
「尾題に続けて」 十二時	浄土讚一本	(6) 心通常日用 滅當度有縁 三乘无不識 外道未曾聞 少恨多毀謗 誓願不流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫相傳
		(7) 心通常自用 威當度有縁 三乘无不識 外道未曾聞 小恨多毀謗 誓願莫流傳 道逢良賢 把手想傳 道逢不良賢 子母莫交傳
		(8) 心中常不用 威度有度縁 三乘表一乘 外道未贈聞 小根多毀謗 威願莫流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫相傳
「讚文に続けて・改行して」 却且在家に五歳已 上父王便取妻為太 子於大衛中□玖徒 綵色襪子上坐十六 大國應有大□長當 之女縁□□過太子 並惣不看見前劫嫌 女妓面与美色取中 □□金□□胎環便 打喜□便与成親三 年之内別床如宿太 子禪坐夫人行現夫 人坐袖太子行現到 七年之時便成出家 父王□差五百个力 助四門如方面阻礙 (裏面) 看失到東門見生老 次□車磨因何如老 車磨答曰有生有老 □子不□便□却廻 如入南門見病西門 見四北門見削 □……		(9) 心同常自用 威當度有縁 三乘無不識 □□未曾聞 小恨多許實 □願莫流傳 □□梁賢 把手□傳 道逢不良賢 子父莫交傳

	文 本	者作/号題	No.	
28 佛 27 巡 26 三 25 處 24 寶 23 塵 22 智 21 惠 20 願 19 清 18 洗 17 暫 16 超 15 坐 14 悟 13 策 12 惠 11 了 10 高 9 觀 8 解 7 至 6 身 5 意 4 法 3 見 2 心 1 法	<p>鏡林空照 通五色現 見心淨妙察 法界亦同然 意珠恒自淨 身光照十方 至心無住處 解脫得清涼 觀想如無想 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明 策子由空淨 悟理无所无 坐臥空消裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願汝證菩提 惠鏡无令開 智者常用明 塵勞須断却 寶藏自然明 池裏金沙水 連中法性流 花開化生子 說我本根由</p>		S5569	(10)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 通五色現 見心淨妙察 法界亦通然 意珠恒自淨 身光照十方 至心無住處 解脫得清涼 觀想如無想 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明 策子遊空正 悟無所緣 座臥空霄裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願以證菩提 惠境勿令開 知中常用明 塵勞須断却 寶藏自然明 池令金沙數 連中法性流 花開化生子 說我本根猶 注想常觀察 三昧寶王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	大乘淨土讚	S6109	(11)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡林空照 心中五色現 見心淨妙察 法界亦通然 意諸恒自淨 身光照十方 意至心無處 解脫得清涼 觀想而無想 高聲不染聲 了諸无所有 惠鏡浪然明 策子由空淨 五季無所元 坐臥空消理 超出李人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无口垢 願如證菩提 惠鏡無令開 智者常用明 塵勞須断却 寶藏自然明 池裏金沙水 連中法性流 花開化生子 說我本根由 處想常觀察 三昧保王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	大乘淨土讚	S6734V	(12)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 通五色現見心 見心淨妙察 法界亦通然 意諸恒自淨 身光照十方 至心无處了 解脫得清涼 觀相如无像 高聲不染聲 了諸無數有 惠鏡浪然明 策子猶空淨 悟理無所緣 坐臥空消慮 超出利人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願如證菩提 惠境勿令開 智者常用明 塵勞須断却 寶座自然迎 池利金沙水 連中法住流 化開花生子 說我本根由 住相常觀察 三昧寶王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	大乘淨土讚一本	BD03925V05	(13)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>連中法性流 花開花生子 說我本根由 注想常觀察 三昧寶王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>		Dx00508V	(14)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 身通五色現 見心淨妙利 法界惣通然 意珠恒自淨 身光照十方 知心無住處 解脫得清涼 觀相而無相 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明 側則遊空正 悟則無所緣 座臥空霄裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願女汝證菩提 惠鏡勿令開 知中常用明 塵勞須断却 寶坐自然迷 他全金沙數 連中法性 花開化生子 說我本根猶 注想常觀察 威寶王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	淨土法身讚	Dx01047	(15)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡林空照 心通五色現 見心淨妙察 法界亦通然 意諸恒自淨 身光照十方 至心無住處 解脫得清涼 觀想如無想 高聲不染聲 了諸无所有 惠鏡浪然明 策子由空相 伍理无所无 坐臥空消理 超出理人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願如證菩提 惠鏡无令開 智者常用明 塵勞須断却 寶藏自然明 池棟金沙水 連終法姓流 花開花生子 說我本根由 處々常觀察 三昧保王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	大乘淨土讚一本	Dx02890	(16)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 心通五色堅 遊神妙利土 法界惣同然 意珠恒自淨 神光遍十方 知心无處所 解脫得清涼 觀像而无像 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明 寂々幽靈淨 恬然无所緣 坐臥空霄裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願汝證菩提 惠鏡無令開 智珠常用明 塵勞須断却 寶坐自然迎</p>	淨土法身讚此通一切處講釋法照	FE 634	(17)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 心通五色現 見心淨妙察 法界亦通然 意珠恒自淨 身光照十方 至心无住處 解脫得清涼 觀想如無想 高聲不染聲 了至无所有 惠鏡朗然明 策子由空淨 悟里无所緣 座臥空消裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願以證菩提 惠鏡勿令開 智者常用名 塵勞須断却 寶藏自然朋 貴鍊金沙水 蓮中法性流 花開化生子 說我本根由 住想常觀察 三昧寶王真 同關三藏教 佛却意中泥</p>	大乘淨土讚	羽 711	(18)
佛却 同關 三昧 三寶 王真 教	<p>鏡臨空照 心通悟色堅 遊神妙利 法界惣同然 意珠恒自淨 神光遍十方 知心无處所 解脫得清涼 觀像而无像 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明 寂々幽虛靜 恬然无所緣 坐臥空霄裏 超出離人天 暫到池邊立 洗却意中泥 清淨无塵垢 願汝證菩提 惠鏡無令開 智珠常用明 塵勞須断却 寶座自然迎</p>	淨土法身讚此通一切處講釋法照	守屋本	(19)

66 秘密不交傳	65 涅槃未交傳	64 此界妄想禪	63 口談文字教	62 真如寂不言	61 佛相空無想	60 真金腹內見	59 知者鎔銷鍊	58 礦中不現金	57 碎未為金礦	56 念佛即無生	55 悟理知真趣	54 自性本負无	53 意珠恒明徹	52 塵垢莫來過	51 勤々返自照	50 知人則解磨	49 寶鏡人家有	48 塵垢更增多	47 不口口口自	46 愚人解磨	45 寶鏡口口口	44 急手早勤修	43 甚物令希過	42 如此不能求	41 諸佛在心頭	40 不識一生休	39 心中寶鏡	38 愚人向外求	37 淨土在心頭	36 是名法性珠	35 若了此中意	34 無念是真如	33 念則知無念	32 西方在目前	31 初夜端心坐	30 念佛入深禪	29 有人專念佛	(10)					
秘密不交傳	涅槃未交傳	四界妄想禪	口談文字教	真如寂不言	仏相空无相	真金腹内現	知者鎔銷鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛即无生	悟理知中趣	自性本圓明	意珠恒榮徹	塵垢不來過	勤勤返自照	知人別解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	不能返自照	寶鏡人家有	急修早勤終	慎勿令虛過	汝自不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性珠	為了此中意	無念是真如	念即知無念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	有人專念佛	(11)						
										念佛即无生	悟理知真趣	自性本无明	意諸恒明徹	塵勞莫來過	勤勤支自照	知人則解磨	寶鏡人家者	塵勞更增多	不能支自	寶鏡人家有	急守造勤修	甚物令希過	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性除	若了次中意	无念是真如	念則知无念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	有人專念佛	(12)						
法彼密不流	涅槃末口	此戒望相禪	口談文字教	直如直不言	佛相空無相	真金復内現	佛知者容消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛則無生	吾理之真趣	自性本元明	意諸恒明徹	塵垢莫來過	不能返自照	知人則解磨	寶鏡人家有	塵勞更增多	不能返自照	寶鏡人家有	急修早勤修	甚勿令虛過	如自不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是明法聖朱	若了聖中意	无念是真如	念則智無念	西方在目前	初夜端心坐	念仏入深禪	有人專念佛	(13)						
																					甚	如自不能求																			(14)		
																					急脩	慎勿靈虛過	汝自不能求	口口在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨口口心頭	是名法性珠	若了此中意	無念是真如	念即無念	西方在目前	初夜端心坐	念佛入深禪	人有專念佛	(15)						
秘密不交傳	涅槃未交傳	此界忘相禪	口談文字教	真如直不言	仏相空无相	真金復内現	至者容消鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛即无生	悟理知真趣	自性本无明	意讚恒明徹	塵垢莫來過	勤々反自照	知人則解磨	寶鏡人家有	塵勞更增多	不能反自照	寶鏡人家有	急修早勤修	甚物令希過	如此不能求	諸佛在心頭	不識一生休	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性除	若了此中意	无念是真如	念則知无念	西方在目前	初夜端心坐	念仏入深禪	有人專念佛	(16)						
																																										(17)	
秘密不交傳	涅槃未交傳	四界壁想禪	口談文字教	真如直不言	佛想空无想	真金腹内現	之者容銷鍊	礦中不現金	碎末為金礦	念佛即无生	悟理之中取	自性本緩名	意珠恒名徹	塵垢不來過	勤々反自照	知人即解磨	寶鏡人家有	塵垢更增多	不能反自照	寶鏡人家有	急修早勤修	甚勿令非過	以自不能求	諸佛在心頭	不識一生口	心中有寶鏡	愚人向外求	淨土在心頭	是名法性珠	若了次中意	无念是真如	念即知无念	西方在目前	初夜端身坐	念佛入心禪	有人轉念佛	(18)						
																																											(19)

題尾	他のそ・等文跋
<p>(10) 67 心通常日用 68 威當度有縁 69 三乘元不識 70 外道未增聞 71 小恨多毀謗 72 誓願不流傳 73 道逢良賢 74 把手相傳 75 道逢不良賢 76 子父不交傳</p>	<p>〔讚文に続けて〕 安土地真言南 无三曼多没随 喃唵度盧地哩 尾娑婆訶普供 養真言唵哦 曩三婆縛□世 □</p>
<p>(11) 心中常不用 威度々有縁 三乘元不來 外道未曾聞 少根多毀謗 誓願莫流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫□侍</p>	<p>〔尾題に続けて、 改行して〕 南无西方極樂世 界大慈大悲阿彌 陀佛<small>（南无西方</small> 極樂世界大慈大 悲觀世音菩薩<small>（</small> 南无西方極樂世 界大慈大悲大勢 至菩薩<small>（</small>地蔵菩 薩<small>（</small>上來稱陽十念 功德資益亡盡惟 願花臺花盖空裏 來迎寶座金床摩 尼殿上乘空接引 聽說苦空八解池 中蕩除无明諸垢 龍花三會速證无 生弥勒尊前分明 授記現存眷属富 樂百年過往亡靈 神生浄土和南一 切賢聖</p>
<p>(12)</p>	<p>〔讚文とは別 紙に〕 思益經卷第三 ／雍熙三年丙 戌十一月廿三 日施主弟子尹 松志因為結壇 □函經妙法蓮 華經破碎各記 頭者</p>
<p>(13) 専心通常日用 威□度有縁 三乘無不息 外道未曾聞 少根多毀謗 誓願不流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 慈父莫教傳</p>	<p>〔讚文に続け て〕 知進索殘子自 手題記之耳交 流辰□</p>
<p>(14)</p>	
<p>(15)</p>	
<p>(16) 心通常自用 當歸自有縁 三乘无不息 外道未增聞 少根多毀謗 誓願莫流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫交傳</p>	<p>〔讚文に続け て・改行して〕 此讚只用●●● ●阿□●●● 一心除誦者不 得乱人傳讀者</p>
<p>(17)</p>	<p>〔公体の後跋〕 上來依諸聖教略述 讚揚五會法事軌儀 以為三卷前之兩卷 具有明文意遺群疑 歸心浄國衆等若念 佛誦讚了即還依前 卷誦迴發願文即散 應知時大歷九年冬 初十月於比京龍興 寺再述浄土念讚觀 門意普□□天人含 生蒙潤皆令脱落塵 滓騰神浄方證妙覺 之圓明共處蓮花之 會願諸智者深信修 行猷離輪迴生死世 界專稱彼佛同往浄 方疾證菩提豈非善 哉樂哉矣有縁之者 願共歸西根性有差 各隨業云尔浄土五 會念佛誦經觀行儀 卷下</p>
<p>(18) 心中常□用 威度々有縁 三乘緩不誠 外道未曾聞 少根多毀謗 誓願莫流傳 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父莫想傳</p>	<p>〔讚文前の首部に〕 癸未年三月五日連 臺寺釋門法律員會 自發勝心寫大乘五 戒讚一更長讚太子 五戒讚大乘无想礼 讚大乘智公和尚十 二時聖教十二時讚 浄土法身讚般若讚 金剛五礼讚十空讚 六根讚維摩讚觀經 十六觀讚出家讚歎 西方歎梁渡讚佛聖 果讚五戒讚員會兼 念得此讚文因為自 身患疾發願書寫先 願皇王万歲郡主千 秋國秦人安時尊壽 稔然願夫人貴壽福 樂百年管内僧俗普 皆樂業法界有情同 登彼岸</p>
<p>(19)</p>	<p>〔公体の後跋〕 上來依諸聖教略述 讚揚五會法事軌儀 以為三卷前之兩卷 具有明文意遺群疑 歸心浄國衆等若念 佛誦讚了即還依前 卷誦迴發願文即散 應知時大歷九年 冬初十月於比京龍 興寺再述浄土念讚 觀門意普欲利天人 含生蒙潤皆令脱落 塵滓騰神浄方證妙 覺之圓明共處蓮花 之會願諸智者深信 修行猷離輪迴生死 世界專稱彼佛同往 浄方疾證菩提豈非 善哉樂哉矣有縁之 者願共歸西根性有 差各隨業云尔浄土 五會念佛誦經觀行 儀卷下</p>